View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

授業中の私語と学生の意識

――私語についての介護福祉科のアンケートの分析――

松 嵜 久 実　小 熊 順 子
嶋田 美津江

キーワード：私語、アンケート、意識と行動の乖離

1　はじめに
2　アンケートの分析①　一年生
3　一年生の意識と提案
4　アンケートの分析②　二年生
5　二年生の意識と提案
6　心理学および教育学の立場からの考察と提案
7　おわりに
資料
①アンケート
②前期授業の過半を終えて

1　はじめに

近年、介護福祉科の学生の学力や授業態度が変化していることが、以前から教職員の間で話題になり、ときには、教員から学生指導のあり方について、問題提起がなされていた（資料②参照）。

今年になり、さらに授業態度について問題が深刻になり、私語、携帯の使用等が目立つ傾向にある。特に私語は熱心に聴いている学生の授業妨害、迷惑行為になっている状況があることやミニテスト、試験の際の成績にも悪い影響が生じている。

授業中の私語について悩んでいる教員は、介護福祉科の教員だけでなく、

他の学科でも多いと考えられる。私語については、教員だけではなく、授業の主体者であるべき学生も悩んでいるのである。授業アンケートや教員独自のワークシートやアンケートなどにも授業がうるさい、私語が多く授業が聞き取れない、教員は私語をする学生を見て見ぬふりをせずきちんと対処して欲しいなどとの具体的な意見も寄せられている。

授業に真剣に向かう学生の学びの妨げとなってしまう私語について、授業を提供する側の教員の悩みはもっともなことであるが、それ以上に学生の不利益は大きい。同じ教室内での仲間どうしによる私語によって私語をしない学生の授業の妨げになるばかりではなく、その私語を発している本人にも不利益がある。

このような状態に対してなんとか解決の道を探りたいとの学科全員の教員の思いから、まず、主体者である学生はこの状況をどのように認識しているのかを知るところから出発したいという結論に達し、学生への私語に対する意識について、2005年７月に１年生と２年生に対してアンケート調査を行った。

資料①に示してあるアンケート表を作成し、それぞれの学年の必修の授業のなかで、教室で回答してもらった。

このアンケートとその後の指導は、学科の取り組みであるが、このアンケートの分析は、三人の教員個人の責任で行っており、その分析は学科の公式の見解でないことを予め、お断りしておきたい。

2　アンケートの分析①　一年生

2.1　学生の回答の基本的特徴

一年生の回答者は91名で、授業中の私語について、「いつも」していると回答している学生は７名、「時々している」学生が73名、私語を「していない」学生が11名となっている。いつも私語をしている学生は７名しかいないが、多くの教員の印象は、教室がざわついているというもので、この学生を中心にして、ほとんどの学生が「時々」私語するために、騒がしい教室になるの

であろう。

このように「いつも」私語している学生を核にして、「時々している」学生が、教室を騒がしい状態にしているが、学生に私語についての自覚がないかといえば、回答からみると、決して自覚がないわけではない。

「授業を静かに聴きたい」といつも思っている学生が35名、「時々そう思う」学生が47名もおり、そう思わない学生は９名しかいない。大部分の学生が静かに授業を聴こうと思っているのであり、その気持ちが行動に反映すれば、教室は静かになるはずである。

また、学生自身も、「授業中に不快な思い」をしている学生が、「いつもある」「時々ある」をあわせると、61名になり、学生自身も不満があることがわかる。

学生たちは、高校時代に私語についてどのような指導を受けていたのであろうか、かれらの自覚するところで見る限り、過半の高校では私語が禁止されていないと判断される。私語が禁止されていたと回答している学生は、２割強しかいない。

表１　一年生アンケートの選択項目の回答分布

１．あなたは授業中に私語をしていますか。　　計
（いつもしている　時々している　していない）
7（８%）　73（80%）　11（12%）　91（100%）

２．授業を静かに聴きたいと思っていますか。
（いつもそう思う　時々そう思う　そう思わない）
35（38%）　47（52%）　9（10%）　91（100%）

３．私語は授業を熱心に聴きたいと思っている人への妨害になると思いますか。
（いつもそう思う　時々そう思う　そう思わない）
44（48%）　38（42%）　9（10%）　91（100%）

５．あなたは授業中に不快な思いをしたことがありますか。
（いつもある　時々ある　ない）　空白
８（９%）　53（58%）　27（30%）　３（３%）　91（100%）

７．あなたの高校時代は私語についてはどうでしたか。
（許されていた　禁止されていた）　その他
22（24%）　61（67%）　８（９%）　91（100%）

８．私語は成績に影響を及ぼすと思いますか。

（いつも思う	時々思う	思わない）	その他
23（25%）	50（55%）	14（15%）	4（５%）	91（100%）

2.2　教室が静かにならない原因の分析

学生自身に静かに聴こうという気持ちがあり、静かでないことから不満が内攻していると考えられるのに、なぜ、私語が頻繁に行われるのか、その原因を限られた質問項目からであるが、分析してみよう。

設問１では、「私語をしていますか」と学生の行動を問い、設問２で、「授業を静かに聴きたいと思っていますか」と学生の意識を問うている。この行動と意識がどのように関係しているのであろうか。二つの設問に対する回答をクロス集計してみる。

授業を静かに聴きたいと「いつもそう思っている」学生は35名もいるが、このなかで私語をしていない学生は、６名にすぎない。35名中、28名とほとんどの学生が、設問１で、私語を「時々している」と回答している。

また、設問３では、「私語が授業を熱心に聴きたいと思っている人への妨害になる」かと問うている。この他者に配慮する意識と行動はどのように相関するのであろうか。

私語が「妨害になると思いますか」という質問に、「いつもそう思っている」学生は44名もいるが、この学生のなかで私語をしていない学生は、設問１からみると、４名にすぎない。44名中、37名とほとんどの学生が、設問１で、私語を「時々している」と回答している。

このように、自分では、静かに聴きたい、あるいは、私語は他の学生の妨害になっていることをきちんと自覚しながら、時々私語をしてしまう学生、意識と行動がズレている学生が３、４割いる。

設問１と設問２の回答の相関係数は、0.151で統計的にみても相関性はあまり見られない[1]。

表２　設問１と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問１ 私語を している	１.いつも	1	3	3	7
	２.時々	28	42	3	73
	３.いない	6	2	3	11
	総計	35	47	9	91

表３　設問１と設問３のクロス集計

		設問３　妨害になると思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問１ 私語を している	１.いつも	3	3	1	7
	２.時々	37	31	5	73
	３.いない	4	4	3	11
	総計	44	38	9	91

なお、「静かに聴きたいと思っていますか」との設問に対して、そのように「思わない」学生が９名いるが、彼らがいつも私語をしているかといえば、本人の自覚では必ずしもそうではない。表２のクロス集計の表が示すように、この９名は、「いつも」私語する、「時々」私語する、私語しない、の三つの回答に３名ずつに分かれるのである。

同じような奇妙な回答は、設問１と設問３の間にも見られる。私語が他の学生の妨害になると全く思っていない学生は９名いるが、これらの学生は、「いつも」私語していると回答しているわけではない。これら９名の学生のうち、「いつも」私語していると回答している学生は、１名しかいない。５名は、「時々」私語すると回答し、３名は、全く私語していないと回答している。

このような奇妙な回答をどのように理解すべきであろうか。可能性としては、回答が彼らの行動を正確に反映していないか、私語について無自覚な学生は、自分の行動にも自覚する、あるいは内省することが弱いことが考えら

れる。

次に高校時代の経験、私語についての指導が彼らの行動に影響を及ぼしているか、どうかを見よう。

表４でみると、禁止されていたと自覚している学生と、許されていたと自覚している学生の､現在の私語の状況をみると､禁止されていた学生の方が、｢いつも｣私語する側に分布が相対的に偏り､｢許されていた｣学生の方が、まったく私語をして「いない」側に分布が偏っている。

高校時代における禁止が彼らの行動を変えなかったと判断すべきであろうか。｢許されていた｣という状況も、それをそのまま受け取るならば、高校における授業の崩壊状況を想像させるものであるが、指導もまた、効果がなかったことも、危惧される結果である。

また、禁止していた高校では、強い指導にも関わらず、学生の意識を変えることはできなかったといえるかもしれない。このことは、高校時代における指導と、他の学生への配慮との関係からも読み取れる。許されていた学校ほど、学生は私語が他の学生の妨害になっていることを強く自覚している。すなわち、禁止されていた学生22名のうち19名が妨害になることを自覚しているが、３名（16%）は自覚がない。これに対して、許されていた学生の場合は、61名中58名が妨害を自覚し、３名（５%）は自覚がない。同じ３名であるが、現れる割合は大きく異なっている。

表４　設問７と設問１のクロス集計

		設問１　私語をしているか			
		１.いつも	２.時々	３.いない	総計
設問７ 高校時代に私語は	１.禁止されていた	5	15	2	22
	２.許されていた	2	51	8	61
	空白等、他の答え	0	7	1	8
	総計	7	73	11	91

表５　設問７と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問７高校時代に私語は	１.禁止されていた	6	11	5	22
	２.許されていた	27	33	1	61
	空白等、他の答え	2	3	3	8
	総計	35	47	9	91

表６　設問７と設問３のクロス集計

		設問３　他の学生への妨害になると思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問７高校時代に私語は	１.禁止されていた	12	7	3	22
	２.許されていた	30	28	3	61
	空白等、他の答え	2	3	3	8
	総計	44	38	9	91

次に私語が成績に影響を及ぼすかという設問８と、他の設問とのクロス集計から、学生の行動と意識を分析しよう。

この二つの設問の間にも、予想されるような相関は見られない。私語が成績に影響しているといつも思っている学生ほど、私語をしていないと予想されるのであるが、決して、そのような相関はない。

表７　設問８と設問１のクロス集計

		設問１　私語をしている			
		１.いつも	２.時々	３.いない	総計
設問８私語は成績に影響していると思う	１.いつも	2	19	2	23
	２.時々	3	43	4	50
	３.思わない	2	9	3	14
	(空白)		2	2	4
	総計	7	73	11	91

以上、いくつかの設問と、学生の行動に関する設問とのクロス集計を分析したのであるが、学生の行動に、他者への配慮、成績への配慮、高校時代の指導が、影響していない。

最後に、静かに聴きたいという学生の意識に、他者への配慮や成績への配慮が影響していないかを検討しておこう。

表８が示すように、私語が他の学生への妨害になることを「いつも」自覚している学生は、「いつも」静かに聴きたいと思っている。そして、対極にある妨害と自覚してない学生は、２／３が静かに聴きたいと思っていない。二つの調査項目間の相関係数は0.657で、相関性はかなり高い。

また、表９が示すように、私語が成績に影響すると「いつも」自覚している学生の２／３は、「いつも」静かに聴きたいと思っている。そして、その自覚がない学生14名のうち、７名は静かに聴きたいとは全く思っていないし、６名は、「時々」しか、静かに聴きたいと思っていない。また、この二つの調査項目間の相関係数は0.518で相関性はかなりあると考えられる。

以上のクロス集計の分析から、学生の意識には、他者への配慮や成績への配慮が影響している。福祉を学ぶ学生に相応しく、他の学生への配慮が強いことは、指導している教員として嬉しいことである。しかし、多くの学生はこのように介護福祉科に相応しい自覚を持っているが、この自覚と行動の間は、見事に乖離している。ひとりひとりの学生をみると、性格の良い素直な学生であるという印象、それにも拘わらず、教室で学ぶ彼らの姿勢は、全体としてみると､福祉を学ぶ学生として相応しいとはいえないのが実態である。

このような現状に対して、どのような対応がありうるのか、対策を提起する前に、学生がこの現状をどのように認識し、どのような対策が望ましいと考えているかを、確認しておこう。

表８　設問３と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聞きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問３	１.いつも	30	13	1	44
他の学生への妨害になると思う	２.時々	5	31	2	38
	３.思わない	0	3	6	9
	総計	35	47	9	91

表９　設問８と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思っている			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問８	１.いつも	15	8	0	23
私語は成績に影響していると思う	２.時々	17	31	2	50
	３.思わない	1	6	7	14
	(空白)		2	2	4
	総計	33	47	11	91

表10　相関係数、ｔ値、ｔの限界値

	設問１、２	設問２、３	設問２、８
相関係数	0.1510741	0.6574446	0.5183639
ｔ値	1.4417784	8.2313155	5.6212972
0.05の限界値	1.9869776	1.9869776	1.9879326
0.01の限界値	2.6322050	2.6322050	2.6342059
自由度	89	89	86

備考　自由度の違いは、設問８で、選択肢以外の回答があるからである。

3　一年生の意識と提案

3.1　意識と行動が乖離している学生の乖離の理由

私語についてまったく無自覚な学生もいるが、大部分は、他の学生の迷惑や成績に対する悪影響を自覚している。しかし、それが私語を止める行動に

なっていないことは、前項で分析したことである。ここでは、設問３で、私語が妨害になっていることを「いつもそう思う」としながら、設問１で、私語を「時々している」を選択している学生の理由を検討しよう。

書かれている理由を列挙すると次のようになる。

先生の話で言っていることがわからない。

ずっと黙るのはつらいのですこしだけ。

ついつい話してしまった。つまんない。向こうから話してくる。

わからないことを隣の人に聞く。

先生の言ったことを聞き逃してしまったときに友達に聞いているから。

話しかけられたりするから。周りがうるさくて。

聞きたいことがある、授業について！！

周囲の友達の影響で、話しかけられるから、周りがうるさい、おしゃべりしているので自分もおしゃべりし、聞き逃すので、周りの人に尋ねる、という行動になっている。また、授業のなかでわからないことを教員に尋ねるという習慣ができていない。まず、友達に尋ねるというのが、多くの場合の学生の行動である。

3.2 私語に全く無自覚な学生の考え

設問３で、私語が他の人への妨害になるかの問いに、「そう思わない」を選択している学生は、なぜ、妨害になるとは考えないのか。該当する回答の学生のうち、理由を書いているのは、二つしかない。その理由は、次の通りである。

いないと思うから。

周りに迷惑をかける行動はとっていない。

ここで、「いないと思うから」というのは、設問の文脈からいえば、「授業を熱心に聴きたいと思っている人」が「いないと思う」ということである。また、私語が「周りに迷惑」な行為であるとの自覚がない。

3. 3　私語を注意されても、すぐ私語をしてしまう理由

授業の工夫が必要なことも書かれているが、多くは、私語が習慣になっていることを推定させる回答がある。典型的な回答は、「しゃべりたくなってしまう」、「癖がある」というもので、私語することが、すでに高校時代から習慣になっているのである。

止まらないから。友達に話があるから。

話したいし、授業がわかりづらいから。

我慢ができない。けじめがないから。集中力がない。

しゃべりたいから。我慢が足りないため。退屈だから。

しゃべりたくなってしまう。

注意されたことについてまた文句を言っていると思う。

癖がある。

集中力が続かないから。

楽しいから。聞いててもわからないから。

教員との関係よりも友人との関係を重視する傾向が現れている。

すぐ伝えたいから。話したいから。友達が第一だから。

教師に話を中断されたから。話しかけられるから。

3. 4　私語に対する学生からの提案

私語に対してどのようにすればよいと学生たちは考えているのであろうか、設問10の回答を紹介し、考察しよう。

まず教員が今後工夫すべきことは、以下の事柄である。

①　授業の改善

興味のある授業では私語をしません。

楽しい授業。先生が話すだけじゃなくて生徒もやるもの。

先生と生徒との対話を増やす（質問をたくさんする）。

授業が楽しいといいと思う。

〇〇先生みたいな授業をすればやめられると思う。

先生が学生の気持ちになれば。

授業に興味を持たす。

みんなに質問したりすればいいと思う。

全ての講義で可能であるわけでないが、参加型の講義、教員が一方的に講義するのではなく、学生に参加させる、授業の目的を明確につたえて、学習意欲を高める、授業に変化をつけて飽きさせない工夫をする等が必要であろう。

② 私語に対する注意の方法など、教室管理の改善

単位をあげなければいい。

先生がちゃんと注意するべき。

成績に反映させる。

注意が甘い。

教室から出す。

これらの意見から、強い指導を求めていることが分かる。私語で勉強を妨げられているという意識があっても、自分ではそのことを私語している学生に伝えることができないだけに、不満が潜在化していると考えられる。

次に学生が自分自身心がけなくてはいけないと提案されているものは、次の内容である。注意し合う等の主体的な取り組みについての意見は一つしかなく、学生内部からの変化は困難であろう。

まじめに受ける。

ひたすら我慢。

みんなで注意しあう。

授業に集中する。

寝るしか方法がない。

私語はしていいと思う。

周りの立場に立つ。

3.5　授業中のうるささに対する学生の反応

私語をいつもしている学生は、反省もあまり見られないが、時々している学生には、私語についての反省もみられる。

真面目に授業を受けている人の邪魔になってると思う。

少しは抑えるべきだと思う。確かにうるさいと思います。

良いと思う。自分にされてやな事は人にしないべき。

確かに、行き過ぎていることがあると思う。少し静かにして欲しいときがある。

席移動があるからうるさい。悩める問題だと思う。

うるさいので、静かにして欲しいと思っています。

気をつけようと思う。うるさいと思う。

うるさいときは、うるさい。先生の話が良く聞こえないことがある。

授業に関係のある私語ならしょうがない。

うるさいのは出て行ってもらいたいです。

静かに授業を受けたいです。すいません。

授業によっては本当にうるさいのがあって、どうにかして欲しいのが時々ある。

学生の私語がうるさくて授業がまともに聞けないことがある。先生の声が聞こえなくなるほどの声は出さないでもらいたい。

良くないと思う。

苦情出してる人がうるさいと思う。

やっぱり私語をすると、先生の話が聞こえないので、良くないと思う。

だったら私語したらしめ出せばー、後は欠席にすればー。

確かにうるさすぎると思う。

一生懸命勉強している人の邪魔になると思います。

しゃべってしまう事はいけないことだと思っている。

真剣に受けている人には申し訳ないです。

勿論、無自覚な学生もいるようである。次に示すような「別に平気」、「ど

うも思わない」という意見は、その典型であろう。

別に平気。

静か過ぎても眠くなるから、ほどほどがいいです。

どうも思わない。

私語をしていない学生は、私語から迷惑を受けており、教員の教室管理を求めている。

僕はそういうことは先生が厳格に注意すべきです。(学生の記述のママ)

そのとおりだと思います。私語を止めて欲しい。

うるさいと思う。

うるさいので何とかしてください。

気にならない。

聴きたい人がかわいそうなので、周りを気にするべきだと思う。

授業に出なかったらよい〔しゃべりたい人は〕。

4　アンケートの分析②　二年生

4.1　２年生のアンケート結果の基本的な特徴

アンケート結果において、二年生と一年生の大きな相違は、相対的に私語が少ない状態を反映しており、核になって私語をする態度を示している学生が少ないし、迷惑を受けている度合いも一年生に比べると弱くなっている。

設問１で、「いつも」私語している学生は、７名で割合からみると、一年生よりも多い。しかし、教えている教員の実感からすると、一年生の方が私語の問題が深刻なのである。

次に「静かに聴きたい」と思っているかの質問に対して、「いつも」そう思っている学生は25名で、一年生よりも少ない。しかし、「そう思わない」と否定的な態度の学生は２名しかいない。このような態度の学生の数の少ないのが二年生の特徴である。このことの裏返しであるが、「授業中に不快な思いをしたことが」あるかとの問いに、「いつも」ある学生は２名（３％)、「時々ある」学生は58名、「ない」学生は12名となっている。１年生の場合は、「いつ

も」ある学生が９名（８％）であったことと比較すると、被害感は弱くなっている。

私語と成績の関係について、２年生の方が１年生よりも、影響すると「いつも」考える学生の割合が小さくなっている。

表11　２年生アンケートの選択項目の回答分布

１．あなたは授業中に私語をしていますか。			計
（いつもしている	時々している	していない）	
7（10%）	59（82%）	６（８％）	72（100%）
２．授業を静かに聴きたいと思っていますか。			
（いつもそう思う	時々そう思う	そう思わない）	
25（35%）	45（62%）	２（３％）	72（100%）
３．私語は授業を熱心に聴きたいと思っている人への妨害になると思いますか。			
（いつもそう思う	時々そう思う	そう思わない）	
39（54%）	31（43%）	２（３％）	72（100%）
５．あなたは授業中に不快な思いをしたことがありますか。			
（いつもある	時々ある	ない）	
２（３％）	58（80%）	12（17%）	72（100%）
７．あなたの高校時代は私語についてはどうでしたか。			
（許されていた	禁止されていた）	その他	
14（19%）	47（65%）	11（16%）	72（100%）
８．私語は成績に影響を及ぼすと思いますか。			
（いつも思う	時々思う	思わない）	その他
19（26%）	45（63%）	５（７％）	３（４％）　72（100%）

4.2　アンケートの項目間の関係

設問２の「静かに聴きたい」という思いと、設問１の私語をしないという行動の相関性について、２年生の場合は１年生の場合よりも、強く現れている。また、１年生では「静かに聴きたい」と思っていない９名が、行動では「いつも」「時々」、そして私語して「いない」に３名ずつ分布していたのに対して、２年生では、「静かに聴きたい」と思っていない学生２名は、「いつも」「時々」私語するという回答に１名ずつ分布している。私語して「いない」という回答はゼロである。自己理解が進んでいると解釈できるであろう。

二つの設問の相関係数は、0.270で、１年生の0.151よりも高くなっている。

意識と行動の乖離は、２年生の場合は、相対的に小さい。統計的には、弱い相関性があるといえる[2]。

高校時代の私語の指導を２年生についてみると、禁止されていたと回答する学生（ここでは「禁止グループ」と呼ぶ）のなかで、「いつも」私語する学生は、２／14、許されていたと回答する学生（ここでも「黙認グループ」と呼ぶ）では、２／47となっている。また、私語していないものは、禁止グループで１／14、黙認グループで５／47で、黙認グループで割合が高くなっている。

設問７と設問２から、学生の意識をみると、禁止グループで「静かに聞きたい」と「いつも」思う学生が２／14しかいないのに対して、黙認グループでは22／47で高い割合となっている。学習への意欲は黙認グループの方が、禁止グループよりも高いと推定される。また、他者への配慮も禁止グループで「いつも」感じているものが６／14であるのに対して、黙認グループで30／47と、大きく異なっている。

禁止する環境のなかで、本人の学習意欲も他者への配慮も育っていないのである。禁止そのものが、そうしたものを育てなかったというよりも、学級崩壊的な環境が育てなかったと推定することができよう。

１年生の場合と同様に、他の学生への配慮と成績への配慮は、「静かに聴きたい」との思いを導いているようである。しかし、１年生の場合に比べて、相関性は弱くなっている。

表12　設問１と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問１ 私語を している	１.いつも	1	5	1	7
	２.時々	20	38	1	59
	３.いない	4	2	0	6
	総計	25	45	2	72

表13　設問１と設問３のクロス集計

		設問３　妨害になると思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問１ 私語を している	１.いつも	2	4	1	7
	２.時々	32	26	1	59
	３.いない	5	1	0	6
	総計	39	31	2	72

表14　設問７と設問１のクロス集計

		設問１　私語をしているか			
		１.いつも	２.時々	３.いない	総計
設問７ 高校時代 に私語は	１.禁止されていた	2	11	1	14
	２.許されていた	2	40	5	47
	空白等、他の答え	3	6	0	7
	総計	7	59	6	72

表15　設問７と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問７ 高校時代 に私語は	１.禁止されていた	2	11	1	14
	２.許されていた	22	25	0	47
	空白等、他の答え	1	9	1	11
	総計	25	45	2	72

表16　設問７と設問３のクロス集計

		設問３　他の学生への妨害になると思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問７ 高校時代 に私語は	１.禁止されていた	6	7	1	14
	２.許されていた	30	17	0	47
	空白等、他の答え	3	7	1	11
	総計	39	31	2	72

表17　設問８と設問１のクロス集計

		設問１　私語をしている			
		１.いつも	２.時々	３.いない	総計
設問８私語は成績に影響していると思う	１.いつも	2	13	4	19
	２.時々	4	40	1	45
	３.思わない	1	3	1	5
	(空白)	0	3	0	3
	総計	7	59	6	72

設問３の私語が「妨害になると思いますか」という問いと、設問２の「静かに聴きたいと思っていますか」という問いの回答の相関係数は、２年生の場合は0.539で１年生の場合の0.657より低い。また、設問８の「私語は成績に影響を及ぼすと思いますか」という問いと、設問２の問いの回答の相関係数は２年生の場合0.313で、１年生の場合の0.518よりもかなり低くなっている。この設問の間で相関性が低くなっていることは、教員組織にとって、反省しなくてはならない点であろう[3]。

表18　設問３と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聞きたいと思う			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問３他の学生への妨害になると思う	１.いつも	23	16	0	39
	２.時々	2	27	2	31
	３.思わない	0	2	0	2
	総計	25	45	2	72

表19　設問８と設問２のクロス集計

		設問２　静かに聴きたいと思っている			
		１.いつも	２.時々	３.思わない	総計
設問８私語は成績に影響していると思う	１.いつも	12	7	0	19
	２.時々	12	32	1	45
	３.思わない	1	3	1	5
	(空白)	0	3	0	3
	総計	25	45	2	72

表20　相関係数、ｔ値、ｔの限界値

	設問１、２	設問２、３	設問３、８
相関係数	0.270381121	0.5378699	0.4013699
ｔ値	2.349688745	5.3380702	3.5869596
0.05の限界値	1.994435479	1.9944355	1.9960089
0.01の限界値	2.647902875	2.6479029	2.6512134
自由度	70	70	67

備考　設問８で、選択肢以外の回答が３あり、相関分析から除いているので、自由度が異なる。

5　二年生の意識と提案

5.1　私語の多い状況に対する学生の意見

設問４では、「授業中のうるささに苦情が出ていますが、あなたはどう思いますか。」と尋ねている。

①　私語を「いつもしている」学生の意見

ちゃんと注意すべきだと思う。

じゃあ自分は、私語は一度もねえのかよと思う。

自分もうるさいから人のこと言えないけれど、先生によって静かにする場合がある。

②　私語を「時々している」学生の意見

私語を時々しているが、学生の意見を読むと、良くないことは、十分自覚

していると考えられる。

うるさいと思います。

当然だと思う。一人の学生のために授業が妨害されるのは、非常に不快。

自分も注意したいと思う。

思いやりを持つべき。

うるさいと思っているので静かにして欲しいと思っている。

私語は困る。

真剣に授業を受けている人に対して失礼だと思う。

直接生徒に注意してください。

私語を一切しないのが一番かもしれないが、私語をするにも限度があると思う。

不快な気持ちになる。

人の話はきちんと聞かなければいけないと思います。

うるさいと思う人に直接いったほうがいいと思う。

話している人に直接注意すればいいと思う。

限度を考えればいくらかの私語は仕方ない。

確かにうるさいときが多いと思う。

私語はしていいと思うが、声のトーンを下げたほうがいい。

直さなくてはいけないと思う。

やっぱり授業は大切だから、静かにすることは大切だと思う。

しかし、２年生ではあるが、授業に関するものであれば、私語しても良いとの考えを持っている。授業に関する私語は、認めるべきであるという考えも教員のなかにはあるであろう。少人数の教室では、自由に話すことで、教室の雰囲気も和やかなものになる。しかし、介護福祉科は、大部分が必修の五十人前後の教室である。授業に関する私語であっても、私語の内容を教員は確かめることはできない。一律に禁止とせざるをえないのである。

２年生のなかには、授業に関する私語をしても良いと考えているものがいることを考えると、教員のなかでの意思一致と指導について、反省が教員に

とって必要であろう。

授業に関する話であればいいと思う。

授業に関する事柄であれば、いいと思うけど、関係のない話は良くないと思う。

また、反省の意見も示されている。

うるさいかなと思うことがある。自分も結構うるさいと思う。

申し訳ないと思う。

静かにする。少し寝る。

申し訳ないと思う。

授業に集中したいときには、うるさいと思うこともあるけど、自分自身いつも静かにできているわけではないので、何ともいえない。

③　私語をしない学生

２年生の場合は、私語からの被害感は１年生の場合よりも低い。しかし、不快に感じている学生がいる。特徴は、学生自身が注意していることである。

一人一人が授業に集中するべきである。

とてもうるさく感じる、本当にいやだ。

ひどいときには注意している。

5.2　私語に対する学生からの提案

２年生の私語に対する学生からの提案をみよう。

①　教員が授業について工夫を心がけること

みんなを引きつける授業をする。

先生が良い授業をし、生徒を引きつける。

楽しい授業なら、参加したいと思うから、私語が減ると思う。

②　教員がより厳格な教室管理を心がけること

先生が注意。

私語をしたら退室させる等の処置をとる。

黒板などを書く量を増やして横向く暇を与えない。

授業の必要性をしっかりと言う。

単位をあげない。

席を替える。

作業を増やす。私語する暇がないくらい。

③ 学生の自覚

２年生の場合は、１年生よりも、自主的にこの問題に取り組もうという姿勢が見られる。

一人一人が意識して行わなければいけない。

学生内で注意。

手紙をまわす（静かにしてって書いてある）。

自分でもいけないことだと思っているから、私語をしないようにする。

周りの人が注意してあげる。

個人、周りの注意!?

自分たちの意識を変えるしかない。

一人一人が私語を慎むよう心がける。

方法は、ないと思う。本人が気づかない限り無理。

みんなが意識する。

やはり全員が同じ思いでなければダメ。

6 心理学および教育学からの考察と提案

6.1 環境因子と個人因子の相互作用

なぜ、意識と行動のずれがおきるか、心理学の立場から、環境因子と個人因子にわけて考察しよう。このように二つの因子に分けるのは、ドイツの心理学者レヴィンが、人間の行動を次のような場の構造の関数Ｆとして把握していることを参考にしている。

行動（Ｂ）＝Ｆ（人（Ｐ）・環境（Ｅ））

このモデルでは、人の行動は個人の属性と環境によって左右されると説明される。さらに集団研究では、集団は力の拮抗しあう緊張体系であり、トポ

ロジー的概念によって表現されると述べている。

また、ＩＣＦの視点においても、生活機能と障害の過程では、構成要素間の相互作用モデルで新しく環境因子と個人因子を追加している[4]。個人と環境の相互作用を把握することで、障害をさらに広い意味で捉えることができるようにしている。

このように、個人の行動に影響を及ぼす因子を個人の属性のなかに還元して説明するのでなく、環境として独立させることは、環境による働きかけを重視するからでもある。

6.2　環境因子

① 物理的環境　話しやすい配置である。隣席とくっついている。通路の幅も狭く空間的に伸びやかな環境にない。前後左右ともに近距離である。

② 教室は唯一自分を表現してくれる自己の存在感を認める居場所である。

③ グループダイナミックスがマイナスのベクトルで働いている。安きに流れ、つられ私語化している。誰も制止することができないグループダイナミックスができあがってしまう。

　グループダイナミックスは、教育においては、学習者個人としてではなく、学習集団としての行動を分析する視点である。この集団活動ないしは集団指導は、メリットと同時にデメリットも生み出す[5]。例えば、諸行事等での学生の達成感はメリットにつながり、授業中の私語は熱心に聴こうとしている学生にはデメリットになる。

④ 学校教育からの延長で教育されてきていない。あるいは教育されてきているとしたら、この辺で遊んでやろう、路線をはずしてみよう、ルール違反をしてみたいという一種高校時代の抑圧から解放された大胆な行動にでる。

⑤ 家庭環境で核家族化し、兄弟も１人～２人で過保護に育てられ他人への配慮、相手の立場に立っての配慮などの欠如、未熟さが目立つ。

　なお、文化人類学者の正高信男は、子ども達の成長における母子密着

型の親子関係の問題点を指摘している。「今日の日本は、（中略）養育はもっぱら母親の手でなされるが、母親はわが子につらい思いや悲しい思いをさせまいとする姿勢が大変強い。」この親から、日本の子ども達はルールを言いつけられることが諸外国と比較して少ないという。「現代の日本の親（とりわけ母親）は、我が子を愛することにおいては誰にもひけをとらない反面、公共の場へ出る準備に関しては、お世辞にも熱心といえない状況が浮き彫りになっている」と指摘している[6] ことは、女性からは反発が予想されるが参考になろう。

⑥　意識の上では大人になりたいがなれない、行動は幼稚である。

⑦　青年期の不安定な時期の特性の表れ。
悩みながら自分の方向を決めていく→相手の反応をみながら決めていく。親からの独立願望など激しい自己の変化に、自己を模索し、確かなものがほしい一方で、無気力になり怠惰な生活を受容するなど危機としての青年期をどのように乗り越えていくか、アイデンティティをどこにおくかが課題になる。

⑧　バーチャルリアリティ感覚で電車の中で化粧をする子は家でのゲーム感覚がそのまま電車の中でも継続し、他者への配慮なしに自分の空間として家感覚をそのまま延長させる。

⑨　ゲーム感覚で私語をしてしまう。

⑩　教室で携帯を禁止されていることに、落ち着かなさを感じ、携帯代わりの私語になってしまう。

⑪　さびしくて孤独を紛らすための防衛反応として自己中心的な振る舞いにでる。

⑫　他者を配慮しない自己中心的な人が増えている。いじめの構造に匹敵する私語の構造がある。

⑬　私語を認知しても感情・認知自体の未熟さ、社会的スキルの低さをあらわしている。

以上は、私語を発生させやすい環境要因を列挙したもので、これらの要因

のうち、各要因がどのように影響しているかは、今後の研究テーマである。このうち、近年学生の間で使用が増えている携帯については、興味深い事例が報告されている[7]。

アメリカのN大学で夏季短期留学生にケータイ電話の使用が禁止されていたが、それを知らずに参加した学生たちは、ケータイを使えるようにして留学したという。ところがケータイが使えないことを知った学生は心の支えがなくなったような、いつも何かが満たされないでいるような、不思議な不安定感にとらわれたという。なかには気持ちが落ち着かなくて、日が経つうちに、焦燥感さえ抱くようになった学生もいた。ケータイなしでも不自由さや不安定感を感じないで生活できるようになるのに、二週間もかかったという。

これは麻薬中毒的なケータイ依存症ということができるだろう。興味深い経験というのはそれだけではない。もっと重要な変化が起きたのだ。学生たちは携帯を使えないので、だんだん物事を自分でゆっくり考えるようになってきたという。それまでは何か気になることや心配なこと、あるいはよく考えて結論をださなければならないことがあると、すぐにケータイで誰かに直接話しかけるかメールを送るかして相談相手になってもらっていたのだ。いつでも話を聞いてもらえるとか相談相手になってくれる人がいるというのは困ったことや悩みの種を自分でじっくりと考えて乗り越える道を探したり、自分の悩みは自分で引き受けるという自律心を育てることができなくなってしまうのだ。また、ケータイの着信状態をいつも見守っていなければならないし、絶え間なく何人もの人々と交信をしなければならないので、待つという心の持ち方ができなくなっているのだ。

6.3　個人因子

①　能力的にも情緒的にも未熟である。

②　性格的な弱さが関与している。

③　集中し、がまんすることができない。

④　孤独であり、自分を認めてほしさに私語をする。

⑤ 対人スキルが育っていない。未熟である。

ここでいう対人スキルとは、もともとはUCLAロサンゼルス校ロバート・ポール・リバーマン精神科医が精神障害者、特に慢性の統合失調症患者に対する訓練において提起している概念をもとにしている。

彼は、精神障害者のリハビリテーションを構造的、機能的に整理し、「ストレス－脆弱性 ── 対処技能モデル」にそって、社会生活上必要な学習をするためのさまざまな工夫を考案し、マニュアル化し、訓練を通してその効果を説いている。

精神障害者は生活の場面での問題解決の際に生活技能を応用して問題に対処する柔軟性に乏しく、また生活の質が貧しいために応用の機会にも乏しい。このため、それらの問題を訓練によって克服することで、生活への適応状況をよりよきものにしていくことを目標にしている。認知や感情、対人的及び道具的技能などすべてを利用し、生活技能訓練の原理と方法を身につけて、学習障害を克服して個人的な目標の達成を助け、交友や家庭、職場、地域などでのより高い機能水準の獲得をめざす臨床的な目標を掲げている。この理論は適応障害にも適用され、生活への適応状況の改善に応用されている。

そこで、われわれも学生の問題で特に対人適応上の問題を有する学生への対処法の手引きとして、また、問題学生のスクリーニングを行う上でのチェックリストとして、さらに現状の調査や問題予防対策のための、幅広く応用できる手法として特に対人技能の手法を参考としたいと考えた[8]。

6.4 問題の深刻さと対策

学級崩壊という現象が、初等・中等教育の現場で言われるようになって久しい。子供達がかわっていることは、すでに多くの指摘がある[9]。

小学校の段階では、現代の子供達のマイナス面として具体的に、次のことが指摘されている。

① あきっぽくがまんできない。

② 傷つくこと、失敗することをとても恐れる、したがって、新しいことに

取り組もうとしない。

中略

④　個人的なしつけができていない。集団生活のマナーを理解していない。

中略

⑥　対人関係を自ら形成しようとする意欲と技術が低い。

中略

⑧　周りに流されやすい、ことの善悪よりも多数派につく。

そして、小学校時代にこのような性質が定着すると、中学校・高等学校で、相当な取り組みをしないと、そのような性質が固定してしまう可能性が高いと指摘されている[10]。

アンケートと学生の行動の観察から、友人関係を重視し、周りに流される、私語が悪いと分かっていても、行動に移せない、集団のマナーの悪さ、等、初等・中等教育からの深い病根があると考えられる。さらにいえば、この問題は、教育機関の内部だけが直面している問題ではなく、学生たちが育っている家庭と社会を含めた問題である[11]。

教員が自身の教室管理に自信をもっている場合は、対応を個人の教員の力量に帰してしまう傾向にある。しかし、現状の問題は、個人の教員の対応を超えていると考えられる。先に、環境因子で指摘しているような、教室の物理的な構造、空間の狭さの改善、学ぶ姿勢を大学教育の早い段階で指導する等の、全体的な構造化された対応が必要であろう。

7　おわりに

学科では、以上紹介したアンケートを行い、後期の最初には、アンケート結果に基づいて、オリエンテーションの時間に教員が指導した。その際、学生の内部にも、不快に感じているものがいること、他の学生の迷惑になっていること等を指摘しておいた。この指導の効果は不明であるが、次のエピソードは、様々な取り組みが必要であることを示唆しているだろう。

後期の第１回目の授業時、教室内はざわざわしていた。そこで、後期

のオリエンテーション時の松嵜先生のアンケートの結果報告と学生への指導のことについて思い出して欲しいと伝えた。教室は一瞬、静まり返った。さらにおたがいに「授業妨害」にならないようにしなければならないと伝えた。この授業妨害という言葉で学生は他の学生の学びの妨げになっているとはっきりイメージ出来たようであった。前期の授業時にいくら声をからして注意しても、ひとごとのようでなかなか聞き入れられなかった。アンケートの結果で自分自身やクラスメイトの思いを理解でき、教員の指導を自分自身のこととして受け止めることができたのだろうか。

学生の授業態度について、学科独自のアンケートは、今回が初めての取り組みである。貴重なデータであるが、このアンケートの評価については、慎重でなくてはならない。なぜなら、私語記入に臨む本人の態度がどうであるか、ありのままに書く、こうありたいと思って書く、適当に書くなど、そのときどのような思い、意識で回答するかによって、調査の結果の信頼性、妥当性に影響がでてくるからである。

今回の調査は予備調査的な意味合いが結果的には強く、今後、信頼性を高め、より内容分析に寄与すると思われる、孤独感尺度、対人スキルをも併せた調査を実施してみたい。

振り返って、介護を学ぶ学生の要件を考え、教員自身の反省にしたい。

学生は私語をする時、まわりの状況を一時忘れ自分達のみの世界になってしまうのだろうか。介護を学ぶ学生は相手の立場を尊重するという考え方を学び、身に付けてゆくことによって利用者との関係性をゆたかにすることが出来る。また、自分を理解してもらい、相手を理解するという相互のよりよい関係性を作り出せる力も必要である。同じ志を持つ仲間どうしが、日々の学びのなかでお互いを理解し合い、介護の専門職としての人格を築いてゆくためにも授業の場は大切であり、単に授業を受けるということではなく、互いをおもいやり、人格を磨く場としてほしいと考える。

教員は学生の興味を引き出せるような授業展開を工夫し、学生は私語を慎

むという協同作業によってより多くの学びを得ることができるように、努力を継続したい。

資料①

アンケート調査

学生の皆さんは実習に勉学に忙しい日々をお過ごしのことと思います。そろそろ前期も終盤にさしかかり大学生活も残りの日々が貴重になって参りました。本学科の教育目標の１つに掲げた「授業、実習に毎回出席し静かに授業を聴き、積極的に学習し、自分を高める」ことをここで再度確認するために、皆さんにご意見をいただき一緒に考えていきたいと思いますのでアンケートにご協力ください。

１．あなたは授業中に私語をしていますか。
　　（いつもしている　　時々している　　していない）
　　その理由
２．授業を静かに聴きたいと思っていますか。
　　（いつもそう思う　　時々そう思う　　そう思わない）
　　その理由
３．私語は授業を熱心に聴きたいと思っている人への妨害になると思いますか。
　　（いつもそう思う　　時々そう思う　　そう思わない）
　　その理由
４．授業中のうるささに苦情がでていますが、あなたはどう思いますか。

５．あなたは授業中に不快な思いをしたことがありますか。
　　（いつもある　　時々ある　　ない）
　　不快な内容
６．あなたはどのような態度で授業を受けていますか。

７．あなたの高校時代は私語についてはどうでしたか。
　　（許されていた　　禁止されていた）
　　その理由
８．私語は成績に影響を及ぼすと思いますか。
　　（いつも思う　　時々思う　　思わない）
　　その理由
９．教師から注意されてもまたすぐ私語をしてしまうのはなぜでしょうか。

10．私語をやめるためにはどんな方法が考えられますか。

11．授業中に私語のほかに携帯使用、化粧、離席、居眠りをする人が見受けられますが、皆さんはこれらの態度についてどのように思われますか。

以上のアンケート結果をもとに学生と共に良い対策を講じていきたいと思います。
紙面が不足の場合は裏面を使用してください。

資料②

前期授業の過半を終えて

2004年６月23日
松嵜久実

介護福祉科の学生を経済学・ニューメディア演習の科目で３ヶ月指導してきました。申しわけありませんが、高校訪問等の関係で学科会議に出席できませんので、指導の結果を報告するとともに、少し問題提起をさせていただきます。

学生の授業態度が悪くなるとともに、基礎能力が低下していることは、すでに先生方もお気づきだと思います。そのような状態でも、学生はこれまで卒業時にはりっぱなケアワーカーになっていたのであり、なんら心配する必要はないとお考えの先生もいらっしゃると思います。私の心配が杞憂であることを祈りつつ、申し上げます。

学生の授業態度が悪くなっているのは、福祉を学ぶ意欲が低下しているからであるとか、粗暴になっているからであるとは考えられません。それよりも、年々学生が教員が自分をどのようにみているか、あるいは大人が自分をどのようにみているかよりも、ごく小数の友達が自分をどのようにみているかを、より気にしていることがあると思います。彼らは、個人的に話してみると、性格も良い学生です。しかし、友達が授業中に話し掛けてくると、多分、それに応じることを何より大切にするだろうと思います。私たちがみて、「どうしてあんなことをするのだろう」と思うようなことでも、友達から批判されなければ平気ですし、互いにチェックする力も低下しています。ですから、教員が小テスト等で学生にプレッシャーをかけて、学業に誘導しようとしても、それがプレッシャーになりにくい心理構造になっており、空回りになる可能性が強まってきました。

短期大学では、これまでも授業態度の悪化がありました。それは、荒れた学校できたえられた学生、教室で自分の思うように振舞ってきた学生が増加したときでした。そのとき、私は、大学にも危機管理が必要であることを教員の集会で提起しました。その時には、そのことはあまり先生方の間で理解されなかったようで、ある先生は、翌年私の問題提起をもう一度読んだとき、その意味が初めて理解できたと、後で話されました。

今回の授業態度の悪化は、これとは異質なものです。荒れた学校で鍛えられた学生に対しては、大学では、自分が主人公になれないことを、理解させればよかったのです。卒業式で名前を呼ばれたとき、「押忍（おす）」と返事をした学生、周りから女番長といわれた学生を経済学の授業で教えたこともありました。大変、緊張を要することでしたが、なんとか、そのような学生を取り込みながら、授業を進めてきました。それは、

大人の規範を受け入れる、受け入れなくてはならないという意識が、学生の間にあったからです。そのような意識がないときには、新しいアプローチが必要であっただろうと思います。

現在の問題の難しさは、私からみれば次のように整理されます。

彼らの基礎能力がある程度の水準にあれば、授業態度がどのようなものであれ、最後には、必要な知識と考えを身につけて卒業してくれるでしょう。介護福祉専攻の学生は、これまでは、短大のなかでももっとも内申書の成績が良い学生でした。しかし、近年は、本学が門戸を緩やかにしてること、技術を身につける福祉・医療分野の仕事として、理学療法士や作業療法士等の魅力が増していることから、入学してくる学生の基礎能力は一般的に低下傾向にあります。優秀な学生もいますが、全体的に低下しています。誰が心配というより、全体として低下しています。

基礎能力がない場合には、期末試験等で集中的に勉強することでは必要な知識を身に付けることができません。普段から学生の勉学態度を丁寧に観察する必要が強まっています。一回の期末試験で、彼らが必要な知識を身に付けてくれることはないでしょう。

全体として基礎能力が低下すれば、学業を身につけていないことについての学生相互間のプレッシャーは低下します。テストの成績の悪いことは辛いことでなくなります。このような学生の内部での問題とともに、学生と教員の間の距離の問題があります。教員の誘導に対して、学生の側に応じる気持ちが弱まっているように感じています。どのように誘導すれば良いのか、検討が必要であろうと思います。多くの学生の間では、学業よりも、友達関係により強い意味が与えられています。

今年、急に基礎能力が低下したわけではありません。振り返ってみますと、昨年の新入生には社会人が四人もおり、その勉学の姿勢は学生の模範になっていました。今年は、学生のなかから、そのような模範になってくれるものが育っていないことが、全体としての勉学の姿勢について不安視させているのかもしれません。

これまで、私は、ニューメディア演習、経済学の授業では、毎回の授業で前回の復習を入れること、学期のなかで３回程度の小テストをすることで、学生に刺激を与えて、学力を育ててきました。２回目の小テストを先週行い、満点に近い学生がいる一方で、４・５割の成績しかとれていない学生がかなりいることに、ショックを受けました。私は、授業に参加している学生が平均として８割の成績をとってくれることを目標に授業をしてきたからです。

全体の基礎能力からすれば、教える内容を数割減らしてでも、小テストの回数を４回、５回に増やして、学習していることを身につけることを、入学後の早い時期に習慣づける必要があったかもしれないと反省しています。私の知っているある大学の教員は、毎回、授業の終わりにテストをして、その成績を次に発表しています。毎回テストができるということは、毎回の授業がそのようにまとまりがあるということで、

授業自体がまちがいなく素晴らしいものになっているのでしょうが、毎回のテストにもかかわらず、学生の間では極めて好評であるようです。

これまで学生指導では、出席管理が重視されていました。出席が悪いと、生活面でも学業面でも問題が生まれたからです。私は、学生の勉学の姿勢を早い時期に習慣付けない限り、出席管理だけでは、教育機関としての責任はまっとうすることはできない時期に来ていると思います。その習慣付けは、教員が個人でやるのではなく、学科全体として取り組むべき課題だと思うのです。

以上、私が感じている問題は、私自身の教員としての力量の無さからくる個人的な問題であることを祈っています。親密な関係を学生との間で築いている先生もいらっしゃることでしょう。そのような先生方には、その影響力を、学生の学業の形成に発揮していただきたいと思います。先生方は、学生を甘やかせることなく、親密な関係を作ることに努力されていることでしょう。もしも、甘やかせから、親密な関係が作られるならば、実習等で社会に出たとき、学生自身も苦労することになることは自明であるからです。施設はケアワーカーのモラルを求めるでしょうから、私たちは、普段の教育のなかで、誘導しておく必要があるだろうと思います。

介護の現場で働く学生を介護福祉士という資格を与えて社会に送り出す組織として、学科は難しい問題に直面していると、私自身は考えています。しかし、学生達を大人扱いして、その考えを尊重するようにすれば、そして学ぶ場としての暖かい雰囲気を作れば、自然と学生は成長してくれる、これまでの実績がそれを示していると、先生方は考えられていらっしゃることでしょう。その考えがこれからも当たることを心から祈りつつ、私の指導の失敗についての報告と、差し出がましい問題提起を終えます。

注

[1] Ｔ値は、1.4418で、有意水準0.05の限界値が1.9870であるので、帰無仮説は棄却されないので、相関性はないと考えられる。

[2] Ｔ値は2.3497で、有意水準0.05の限界値が1.9944であるので、弱い相関性の否定仮説は棄却される。しかし、有意水準0.01の限界値が2.6479であるので、強い相関性の帰無仮説は棄却されない。

[3] 相関係数、検定については、森田優三著『新統計概論』1974年、日本評論社、第３章、第８章を参照した。また、データ処理は、エクセルを用い、坪井達夫著『Excel で学ぶ統計　統計で学ぶ Excel』2001年、エーアイ出版の第５章、第10章を参照した。

[4] 『ＩＣＦ　国際生活機能分類 ── 国際障害分類改訂版 ── 』2003年、中央法規、P.17

[5] 台利夫著『集団臨床心理学の視点』1991年、誠信書房、99～100頁。

[6] 正高信男著『ケータイを持ったサル－「人間らしさの崩壊」』2003年、中央公論新社、第１章参照。

[7] 柳田邦男著『壊れる日本人』2005年、新潮社、23～25頁。

[8] R. P. リバーマン・W. J. デリシ・K. T. ムシャー著、監訳　池淵恵美『精神障害者の生活技能訓練ガイドブック』1992年、医学書院、P.５～10、監訳　安西信雄　訳　東京大学医学部付属病院精神神経科　デイホスピタル担当医、『生活技能訓練基礎マニュアル　対人効果訓練：自己主張と生活技能改善の手引き』1992年、創造出版。

[9] 川上亮一著『学校崩壊』1999年、草思社。

[10] 河村茂雄著『学級崩壊に学ぶ』1999年、誠信書房、18～22頁。

[11] 深谷昌志著『無気力化する子どもたち』1990年、日本放送出版協会、Ｉ「豊かな社会での成長」を参照。

Summary

An analyses of students' chat in classes

Hisami Matsuzaki, Jyunko Oguma
Mitsue Shimada

Although professors try to keep classrooms quiet, some students keep on chatting with each other. Both professors and students deeply worry about a noisy circumstance.

Professors in the nursing care department have already noticed that the circumstance of classes have been deteriorating year by year. Some professors fear that some students would never study even if they attend classes. Therefore the department conducted a survey concerning chat in classes, distributing questionnaire to each student during classes.

The survey reveals interesting tendencies among students.

Firstly, there are some hard core students that always chat and destroy circumstances of classes. Secondly, most students wish to listen to lessons quietly, however they cannot keep to be quiet against their wish. Thirdly, their interest to accomplishment of study and to other students affect their wish to be quiet.

Some proposals are made upon these fact-findings.